



# う 羽 化 か

1999年8月  
第15号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 宗 助 悦 子



## 目 次

視覚障害者の漢字指導を漢点字で(大西 雅廣) . . . . .	1
漢点字は何のために(東野 トシエ) . . . . .	3
本のご紹介 . . . . .	6
「点字毎日」より転載	
「点字の漢字」選定基準の提案(春日 満治) . . . . .	7
義務教育のなかで漢点字を(小林 松治) . . . . .	8
連載「点字から識字までの距離」(14)(山内 薫) . . . . .	9
イラスト版「漢点字ってどんな字？」(14) . . . . .	11
点字の読みづらさと漢点字の触読について(3)	
(岡田 健嗣) . . . . .	17
教室から 子どもから 白川文字学へ(伊藤 邦博) . . . . .	22
ボランティア活動について(再考)(宗助 悦子) . . . . .	26

## 視覚障害者の漢字指導を漢点字で

鳥取県立鳥取盲学校教諭

おおいし まさひろ  
大西 雅廣

石川倉次が1890年に日本の点字を考案して以来、視覚障害者の教育は、飛躍的に向上した。今では、教科書をはじめ、一般教養書から専門書に至るまで、豊富に点字図書が供給されるようになった。公的な点字出版物だけでなく、個人的ニーズに応えるために、全国各地で点訳ボランティアが活動しておられる。視覚障害者の情報源はことばであるから、点字による恩恵は図り知れないものがある。しかし、点字は表音文字だから、耳で聞いて分からないことばは、点字で読んでも理解できない。どれだけ多くの視覚障害者が、漢字のない国に生まれればよかった、と考えたことだろう。

ところが、今から約30年前に、点字で漢字の部首符号を作り、部首の組み合わせによって、漢字の意味を表わす漢点字が考案された。今では、専門書から小説に至るまで、数千冊の漢点字書が作られ、多くの視覚障害者が漢点字の読書を楽しんでいる。

漢字とことばが正しく結びついてこそ、日本文化を正確に理解できるのである。近年、パソコンの発達に

よって、簡単に仮名漢字変換でき、視覚障害者にも音声ワープロを使用して、漢字仮名交じり文が書けるようになった。それだけに、同音異義語の問題を解決しない限り、当て字ばかりの文章を作成することになる。漢字符合作としての漢点字を獲得することによって、日常的に漢字文を読む手段を持っていてこそ、ワープロによる漢字も正確に書けるのである。

また、電子化された文書が大量に提供される今日においては、点字プリンタやピンディスプレイ上に漢点字出力して、即座に原文のまま読めるようになった。漢点字によって、「書ける楽しみ」から「読む面白さ」へと、視覚障害者をいざなうためにも、盲教育に漢点字を導入し、一般学校で漢字指導をするように、盲学校でも漢点字を指導することを、関係機関に要請しなければならない。

私は最近、同音異義語について研修した。ここにその一例を記すが、問題文がすべて仮名なのは、点字で出題されたからである。

つぎの かんじじゅくごを かいてみよう。

はなの「かんしょう」かい①。

めいきよくを「かんしょう」する②。

だれからも「かんしょう」されたくない③。

あきわ「かんしょう」てきなぎせつだ④。

ここで筆者が問題にしたいのは、本校のワープロ指導（漢字指導）が、音声による仮名漢字変換方式で行われているために、上記のような出題に対しては極めて不利だという点である。これだと、漢字の知識といっても、単なる音訓の知識であつて、表意文字としての確かな認識を獲得することができないから、確実な文章が書けるようになるのは非常に困難である。音声変換方式では形（符号）としての漢字を持たないから、日常的に漢字文の読書ができない。小説や教科書等、豊富に漢字文を読む手段を持つてこそ、ワープロによる漢字も正確に書けるといふものである。

上記の問題では、「かんしょう」をどんな漢字で書くかということであるが、字形を持たない全盲生にとつては至難の業である。彼らの頭の中には漢字に相当する符号（漢点字）がないから、次のように覚えるより他に方法がないのである。

- 「かんこうちのかん みる、しょうばつのしょう」①  
「かんべつするのかん かがみ、しょうばつのしょう」②  
「じゃっかんのかん ほす、こうしょうするのしょう わたる」③  
「かんしんするのかん、ふしょうするのしょう きず」④

読者諸氏よ、よく考えていただきたい。すべての熟語について、音訓だけによる漢字変換をさせることがいかに酷であるかを。皆さんが、字形を持たずに音だけで漢字変換をしようと思ふだにゾツとするであろう。

①の「かんこうちのかん みる、しょうばつのしょう」も「観賞」という字形になつてはじめて脳裏に焼き付けられるのである。ちなみに、②は「鑑賞」、③は「干涉」、④は「感傷」的、となつて字形としてイメージしてこそ、真の意味で日本語の読み書きをしたことになるのではないか。漢字符号として、それぞれの部首を点で表現し、その部首の組み合わせによつてできた漢点字は実に素晴らしい。教科書をはじめ、多くの小説が漢点訳されている。漢点字で読書ができてこそ、ワープロにも上達できるのだ。

「点字指導だけでも大変なのに、そのうえ漢点字など、教師も覚えられないし、生徒の重複化が進んでいる現状では、そんなところまで手が回らない。それに点字の漢字には二種類あつて、それがどちらに決まつたわけでもないのに、一方の漢点字をやるわけにはいかない。」

現場からはそんな声が必ず聞こえてくる。一步譲つて、私はこう言いたい。「どちらの符号を用いてもかまわないから、全盲生に実態の伴つた知識を与えるた

めに、字形としての漢点字符号を持たせてやってほしい」と。

指導者は、無理に漢点字を覚えなくてもいい。虎の巻を見ればよい。それに、テキストファイルで書かれた漢字文を自動的に漢点字に打ち出すソフトができています。晴眼者は、漢点字を書かなくても、ワープロで普通の文章を書いてさえくれれば、パソコンが漢点字にするのである。全盲である筆者が、比較的誤字を少なく書けるのは、こうして書いた文章を一度漢点字で打ち出して読んでから提出しているからである。

さらに、漢点字を使うと、逐一仮名漢字変換しなくても、直接キーボードから漢点字入力が可能というのだから、そのメリットたるや計り知れない。学校では、入門程度でも漢点字を導入して、卒業後も漢点字（漢字文化）に親しませたい。

そこで、鳥取の野島静氏や羽化の会代表の岡田健嗣氏を中心に、『盲教育に漢点字の導入をすすめる会』が結成された。この会では、文部大臣をはじめ、全国盲学校長会、日本点字委員会ほか関係団体に対し、盲教育に漢点字を導入するための署名活動を計画していることを書き添えて、私の乱文を終わらせていただくことにする。

## 漢点字は何のために

東大阪市 鍼師(自宅開業) 東野 トシ工ひがしの

岡田さんより、原稿依頼のお話しを随分以前からいただいているのですが、なかなか文章にならなくて今日になってしまいました。

「漢点字を学習している人は、なぜ漢点字を学び、その漢点字を何に使っているのですか」という人がいらっしやるそうですが、私はこのお話しを聞かせていただき非常に驚きました。

では、次に私がお尋ねさせて下さい。

「なぜ晴眼者は漢字を習っておられるのでしょうか？義務教育の中で漢字の書き取りなどといってかなり漢字の学習に力をいれておられるのではないのでしょうか？また、社会人になられて、その漢字を使って何をされているのでしょうか？」

晴眼者が仮名を習われ私たち視覚障害者は仮名点字を習います。それと同じように晴眼者が漢字を習われるように私たち視覚障害者も漢点字を習っているのです。それをどう用いるかは晴眼者も視覚障害者も同じで、それは個人の考え方によって異なることでしょう。

これが漢点字を習い初めて、四半世紀以上過ぎた者

が書いた文かと笑われるかもしれませぬ。そして、視覚障害者の義務教育の現場に漢点字の教育をと叫んでいる者が書いた文かと……。

私は10歳ぐらいまで指数30センチぐらいの視力がありました。わりと色覚ははつきりしていたように思います。

7センチ程の積み木に幅5ミリ程で平仮名を彫つてあるものを持っていました。お友達の積み木より大きくて木もツルツルしていて、ちよつとした私の幼いころの自慢の玩具のひとつでした。

それを利用して平仮名は覚ええました。視力がなくなり見ないとともに忘れ、教室で休み時間に黒板に字を書いて遊び消さないまま次の授業が始まりました。

「この字は小学校の低学年が書く字だ」といわれ、チヨークを持って遊ぶことはそれいらいしなくなりました。

点字を修得するにしました。学校代表で点字協議会にも数回出場させていただきました。

カニタイプライターを使用するようになりましたが、今でも数行書いた用紙に数行書き足すには点字板に勝る道具はないと思っています。漢点字を両面書きできる点字板の作成を望んでいます。

晴眼者と文通をするために、仮名タイプライターを

習いました。晴眼者のお友達は点字を習って私に点字でお手紙をくれますから、私も仮名タイプライターを習って普通字で出すのがマナーだと思つたからです。

そのころ、私たち視覚障害者も覚えられる漢字の点字（漢点字）があることを知りました。日本万国博覧会があった1970年です。早速漢点字の創案者である故川上泰一先生の門下生にさせていただきました。1975年ごろに、漢点字が書ける4行書きの携帯定規が作成されました。それまでは前置符を付けてテキストの書き取りなどを書いていました。書くことはできましたが大変読みづらかったです。

故川上先生の研究室になつていた印刷室に、邦文タイプライターがおりてあり、それを触わり手を真っ黒に汚し先生に笑われました。「これは、諸君には使えません、そのうちコンピューターが登場する、それで諸君が漢点字を入力するとテレビのような画面に漢字が映ります。もちろん晴眼者が漢字で入力したものを、そのまま漢点字に書き出してその場で読めるようになりすから、今からしつかり漢点字を覚えておきなさい」。

1984年にPC6601というパソコンにであい、音声仮名タイプライターを作成していただきました。また、漢点字を直接入力すると、漢字仮名交じり文が

印刷できるチノワードがあることを知り使うようになりました。

故川上先生がコンピューターのお話しをして下さったときは、夢のような感じで聞いておりましたが、村尾DOSさん開発のOPというソフトは全く先生がおっしゃっていたものになりました。この原稿はそのOPを利用して書いております。岡田さんへは漢点字プリントしたものとテキストファイルの両方で提出させていただきます。

視覚障害者の中には、高級なパソコンを使っておられ、また、ものすごくハイレベルのことをされているのに、近頃でも仮名文字のみの文を書いている方がおられるようですが、1970年代のように私たち視覚障害者は、仮名タイプライターしか使用できない、邦文タイプライターは使用困難だった時代は、仮名文しか書けなくてもしかたなかったかもしれませんが、このように、パソコンも個人で持てる、視覚障害者が入力できる道具もあるということになると、やはり漢字交じり文を書けないといけないようになるのではないのでしょうか？

とはいっても、仮名漢字変換で入力していると、ソフトが変換ミスをすることがあります。その場で気がつけばいいですが、音声では後から1字1字確認する

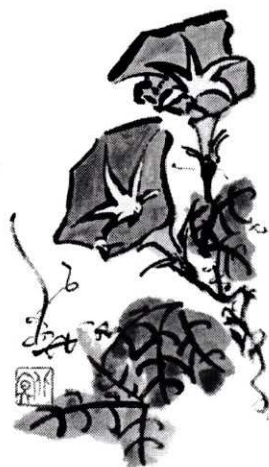
のはほんとうに大変です。

そこで、漢点字の登場です。普段に漢点字で読書し覚えておきます。その覚えた漢点字を使って漢点字直接入力するというのがベストです。

表音文字で、ただストーリーを追うだけではつまらないです。漢点字で日本文学を読んで、日本語の醍醐味を堪能することは、いうまでもなく大切なことです。視覚障害者がこのことができるのは漢点字ならではありません。

漢点字が世に広まりますよう切望しております。

1999年6月

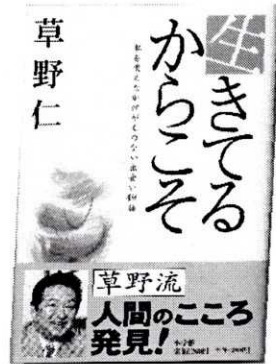


## 本のご紹介

草野 仁著 『生きてるからこそ』

1999年8月1日発行

小学館 刊



ちょうど二年前、草野仁氏が司会をなさっておられるテレビ番組「追跡〈あなたが主役〉」に、本会の活動をとり上げていただきました。テレビ東京系列から全国に放映され、大きな反響をえました。ここで従来  
の点字には漢字がないことと漢点字の存在が、初めて  
公にされました。製作・放映に当たられたスタッフの  
皆さまには、深く御礼申し上げます。

その後氏は、週刊雑誌「女性セブン」のご自身の欄

に、漢点字と本会の活動を取り上げて下さり、視覚障害者の文字の文化に、一般の関心を高めて下さいました。

この度氏は、このように書き継がれた稿を一冊にまとめられて、『生きてるからこそ』として小学館から上梓されました。

ご一読下さい。

(帯から引用)

【草野流ポジティブ・ライフのすすめ】  
ともすれば、人生を投げやりに考える人も多いなか、本著に紹介したみなさんは「生をより輝くものになりたい」と常に前向きです。現実を真摯に受け止め、自らすすむ道を真剣に模索し、才能を開花させていきます。ポジティブにものごとを考えれば、いろいろな出会いは大きなチャンスになるのです。

「あとがきにかえて」より

週間点字新聞(点字毎日)の「論壇」の欄で、点字の漢字について論議が交わされました。ここに転載させていただきます。

『点字毎日活字版』96年06月20日(第)より

### 「論壇」点字の漢字「選定基準」の提案

東京都・元盲学校教員 春日 満治 氏

昨年本欄で、私は盲学校の国語科で6点漢字の学習を提起したが、その後の反響に改めて視覚障害者に潜在する漢字学習のニーズを実感させられた。ただ漢字の習得は容易ではない。小・中学校の国語では書き取りのドリルとテストによる確認を積み重ね、その定着に苦勞している。漢字の力はそれだけ文章理解や作文力をも左右する重要なものだからである。点字の児童・生徒はその負担がないだけ楽とも言えるが、漢語がぐんと増える小4からは、この漢字不在がハンディとなつてくる。単なる知識ではなく、漢字を自分の文字として使いこなす基本的な力が必要で、中学部卒業までに教育漢字程度の「点字の漢字」を学習するようにはできないかと思う。しかし、漢点字と6点漢字の併存する現状では、そのいずれを学習対象とするかをまず決めなければならぬ。難問である。

大河原欽吾氏の「点字発達史」は、その解決に多くの示唆を与えてくれる。特に英米におけるブライユの

点字とニューヨークポイントとの対立と統一の歴史は参考となる。また我が国の点字選定の経緯と論議は、盲教育草創期の活気とエネルギーを生き生きと伝え感動的である。

そこで私はかつて石川倉次先生が提案された「点字選定要旨」の例にならない、盲学校の国語科で学習する「点字の漢字」の選定基準の試案を次に記し、ご批判を待ちたいと思う。

(1) 漢字に対応した単純で論理的に一貫した構成法則を持つこと。

(2) 触読文字として読みやすく、また書きやすい安定した形態であること。

(3) 記憶しやすく学習が容易なこと。

(4) 従来の6点の点字体系の中に、矛盾や重複がなく包括され得ること。

(5) 普通文字との相互交換が容易で、応用・発展の将来性があること。

日本点字委員会の中でも公正な立場の小委員会を設置し、この試案をたたき台に論議し、成案をまとめられてはいいかがか。しかる後、その基準に基づいて漢点字と6点漢字を客観的、実証的に比較検討し結論を出すのである。21世紀も近い。点字の世界にも漢字への新たな胎動があつてしかるべきと、私は考える。



「論壇」義務教育のなかで漢点字を

大阪市ヘルスキーパー 小林 松治 氏  
こばやし まつじ

私のように小学1年生から点字オンリーの教育を受けてきたものにとつて、正しい漢字の用法を身につけることはなかなか難しいことです。それは言うまでもなく私の学齢期、点字の漢字が無かったためです。というより今も、盲学校で学ぶ全盲の（点字使用の）児童・生徒は、かなオンリーの環境に置かれ続けているわけです。日本人の中でこのような教育をされているのは、彼ら全盲児童・生徒以外には誰もいません。これが差別でなくて何でしょうか？

点字の漢字教育を論ずるときいつも言われるのが、点字の漢字が二通りあるので、これが統一されないのが教材として取り入れられないということです。初めにも書きましたように、漢字の用法の難しさに悩みながらも、私は読み書き共にこのごろでは、かなり堂々と漢字を使っています。それはまったく、私の学んだ点字の漢字が漢点字であつたおかげだと思つています。私が、成人してから漢字を習い始めたにもかかわらず、その用法にこれだけ慣れてこられたのは、なんと

いつても、漢点字で日常的に読書をしているからだと思つたのです。文字というのは、記憶として頭にたたき込むのではなく、日常的に使うことによつてほとんど反射的に出てくるように学習するものだからです。漢点字では、常用漢字までならほとんどの字が1文字2マス（1マスの字もある）で表せます。それに対し6点漢字では、ほとんどの文字を3マスで表していると聞きます。漢字1文字がそんな長くなる状態で読書をしたらどうなるでしょうか？

それにもう一つ、点毎紙上で拝見した漢点字に関する投書で記憶に残っているのは、例えば「生」（2マス漢字）より、それにりっしんべんが付いた「性」（1マス漢字）の方が普通字では複雑なのに、漢点字では逆に単純になるという矛盾を突いた指摘がありました。

確かにそれは矛盾といえれば矛盾でしょうが、頻繁に使う字を1マス漢字に当てるなど、合理的かつ全体の統一を保つ工夫がなされた結果であれば、それで良いと思えます。

小さなことにこだわるより、上記の全盲児童・生徒の文字教育の実態にこだわるべきではないでしょうか？

## 点字から識字までの距離(一四)

山内 薫(墨田区立緑図書館)

以前、本稿で点字の右手読みと左手読みについて取り上げた。筑波大学付属盲学校の先生が、この問題について発表しているので紹介したい。ただしこの研究は、従来の仮名点字の読みを対象にしたもので、漢点字や六点漢字は含まれない。

まず、二一名の先天性盲児の点字読速度発達を七歳から一二歳まで、縦断的に分析した結果、速い手と遅い手は既に点字学習を開始した七歳で優位差が生じ、手の優位性は早期に確立する。そして、左右差の小さい両手型、右手型、左手型の三つのタイプに分類できるといふ。二一名中両手型は四名、右手型が六名、左手型が一一名だった。

そこで、毎年行われる全日本点字競技大会の速読みの部で上位入賞経験者など、点字の読みが速いといわれる人達五二名に協力してもらって、この課題について実験を行った。ちなみに、歴代の優勝者の点字読速度の最高は一分間に六二八文字、三一回の大会の平均は五〇二・七文字で、NHKのアナウンサーがニュースで読む文字数(シラブル)が四五〇というから、相当速いといえる。

この三つのタイプは、被験者に両手読みと右手と左手による三つの方法で課題文を読ませ、それぞれの一分間の正答文字数を測定し、得られた右手と左手による読速度から決定する。左手読速度から右手読速度を引き、その値を遅い手の読速度で割って得られた値が〇・二を超えたものを左手型、一〇・二より小さいものを右手型、土〇・二以内を両手型と分類している。例えば、左手が一〇〇文字、右手が一〇〇文字であれば〇・二となる。つまり左右の速度の差の二〇%を基準にしている。

その結果五二名のうち右手型は二三名(四四・二%)、左手型は二二名(四二・三%)、両手型は七名(一三・五%)と左右に差はなく、両手型が少ないことが分かった。ちなみに一番速かった人は両手読みが六二九文字、右手読みが五一七文字、左手読みが五〇一文字と両手型、二番目の人は両手が五〇八文字、右手が四五六文字、左手が三二一文字と右手型だった。三位の人は、両手五〇八文字、右手一〇五文字、左手四八五文字と左手型だった。

また、速い片手読みと両手読みの関係では、両手読みの人が平均で三二%、右手読みの人が一四%、左手読みの人が六%それぞれ両手を使うことによって読速度がアップした。(ただし、片手読みの速度が両手読みの速度を超えていた人が一三名いた)

今回の実験の結果、読速度に関わらず、左右読速度の比が二以内であると両手読みの利得が大きく、それを超えると両手読みの利得が小さいことが明らかになったとしている。

従来、左手読みの良い点として、(一)利き手でないため普段余り使わないので指先が柔らかく敏感である。(二)両手を使って左から右へと文章を読むときには、普通右手が先にたどって概要をつかみ、その後左手で細かいところを読んでいくから、左手がより発達する。(三)左手で読みながら同時に右手で書く転写の場合の効率的な作業の必要性などが挙げられている。一方右手読みの良い点としては、左から右へ移動する点字の読みは右手の動きに都合が良く、運動能力が優れているので知覚能力も利き手である右手がよいというようなものだった。左手型には左右差の大きな被験者が多かったのに対して、右手型に左右差の小さい被験者が多かったのも転写が影響しているのかもしれない。

では、両手型の読速度が速いかというと、最高読速度を示した人以外の両手型の人で、四〇〇文字を超えた人はいなかった。

「点字読みに最適な手はない。左右いずれの手を用いるかは個々人の好みと読書習慣、あるいは課題の内容容という三者の相互作用によって決定する」(ミラー

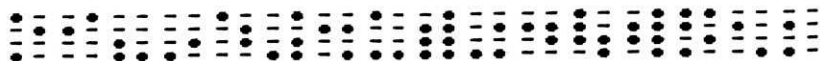
一九八四)という。

今回の結果として重要なのは、左右読速度の比が一対二以内という左右差の小さい被験者に両手読みの利得が大きかったことで、行頭は左手だけで読み、行中央は両手を揃え、右手が行末を読んでいる時に左手は次の行頭を探す、又は右手の人差し指が行末に届く前に左手で次の行の最初を読み始めるという、同時に別の字を読む情報のパラレル入力と手の機能分担によるストラテジーであるという。多くの被験者が「行換えあるいは行移しの時に、右手で行末を読みながら左手は次の行を読んでいるので、詰まらなく読める」と答えている。さらに両手読みの被験者は「左右別々のものが読める。例えば表や地図があり、裏にその説明があると、左右の手で紙を挟んで読むことができるし、注釈が別ページにあったときなど、別々のページを両手で読める」と答え、両手読みの有用性を指摘している。

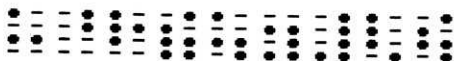
さて、以前は大脳両半球の機能差ということからこの問題を考えたわけだが、今回はもう一度「学習障害」の事例から、右→左のことを考察したい。

今回の内容は、牟田口辰己「点字読み熟達者の読速度に関する研究」(『視覚障害 一五九』所収)に全面的に依拠しています。

# 山々を低く覚ゆる青田かな



## 与謝蕪村



未 志 お 志 未

いい天気、  
この前田植えをして  
いたのに、こんなに  
大きくなつたのね  
稲の匂いって、あま  
いんだね

水がたつぷりあつて  
暑い暑い夏になると  
こんなに大きくなる  
のね

胸まで届きそうだ！  
でもお米はまだ入っ  
ていないんだね

秋になると黄色く  
なつて垂れてくるわ  
この田圃、どれだけ  
お米が穫れるのかな

志 志朗君

未 志朗君  
みき 志朗君  
おねえさん



イラスト版



# 漢点字ってどんな字？ 14

お 志 未 お

今回も蕪村ね 未来ちゃん  
 この句、説明してね  
 ここの風景のとおりよ  
 大きく育った稲と  
 その向こうに見える山  
 稲が伸びた分  
 山の緑と重なって  
 山が低くなったように  
 感じられる、そうだよ  
 そうね  
 夏は緑が深くなって  
 山も野も田圃(たんぼ)も  
 一面青々としてくるのね



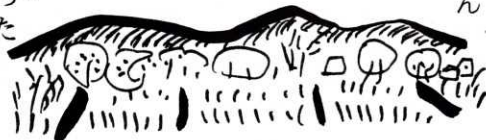
三角形の山を象った かたど  
 象形文字  
 音は「サン・セン」  
 訓は「やま」

真ん中に縦線 その左から下角かき  
 (真ん中の縦線とは下端で接する)  
 右に短い縦線  
 (下が角かぎの右端に接する)

漢点字



[ヤア]



『山』の字は、もとは高い  
峰が三つある山の形ね



漢点字では  
 山へんや  
 「ヤア」

山かんむりになる時は  
 「ヤ」の符号で表すんだ

山を含む漢字

嶺



[ヤオ]

峰



[ヤホ]

島



[セヤ]

峠



[ヤウ]

崎



[ヤケ]



漢点字にはみんな  
 「ヤ」の符号  
 が入っているのね



※ 「」内のカタカナは、漢点字符号の下6点をカナ読みしたものです。

# 低

字形は

にんべん

氏の下に一

にんべん

+

積み土した底を

表す部首の

形声文字

音は「テイ」

訓は「ひくい」

へん つくり

「人+氏」

つくりは氏とは別字

左斜め線(ノの字)

の中央から下に縦線

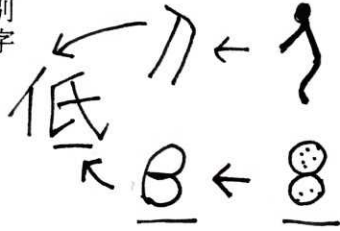
氏は、左斜め線(ノの字)

に続けて下斜めかぎ

斜めかぎの中央から右に横線

ノの字の中央から横線に交差して

右にはねる手かぎ



漢点字



[45ン]

未

この字、にんべんに、氏の下に一と  
思っていたんだけど、違うんだって



お

未

志

そう、氏とは成り立ちが違うのよ

土を積み上げた形で、

下のーがその底を

表しているんだって

その意味から会意文字

なのね

それが音符(氏)で

この字の音になってるのよ

意味は「背の低い人」で

訓が「ひくい」になるのね

漢点字ではね、部首にもなる

基本的な漢字ということ

高とペアの符号にしたんだよ

うまい組み合わせになってるよ

高

低



テイ  
氏一を合む漢字

底  
テイ



抵  
テイ



漢点字では...が、部首の音符号になるんだ  
これは氏が部首になる時と同じだけど  
音は(テイ)なんだね



氏  
シ



紙  
シ



漢点字でも似ているね

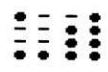
# 覚

ものを教えたり  
受け取ったりする意の  
形声文字  
音は「カク」  
訓は「おぼえる・さめる」



上に点を三つ(かたかなツの形)の下にワかんむり  
(短い縦線、短い上斜めかき)、その下に見  
見は目(縦線、上角かき、中に横線二つ、下に横  
線)の下に、ひとあし(左にノの字、右につりばり)

漢点字



[36×]

お この字はどういう字?

未 学(學)と同じように、上の部分は  
家の中で教えたり教えられたり  
する意味で、「カク」という  
音も表しているの  
その下に「見」で  
理解するとか  
悟るとかの意味を  
持っているのよ



お もともとは上の部分は  
手でものをやりとりする意味ね

志 漢点字は、  
覚 を

見 を の符号で表すんだ

これはうまく  
できているよ  
ほんとうに  
覚えやすいよ



※ 「」内の数字は、カナ読みできない点字符号の点の位置の番号です。



14 25 36

# 青

草の芽生えと、さわやかな  
清水を表す会意文字  
音は「セイ・シヨウ」  
訓は「あおい」  
もとは生と井から  
なる字

上の部分は 生 のノの字を取った形  
(横線二本 中央を貫く縦線 下に横線)  
下の部分は 月  
(縦線 上角かぎ 中に横線二本)

## 漢点字

⋮⋮⋮  
⋮⋮⋮

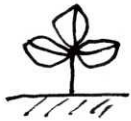
[シセ]

生井?



未

この字は、上が 生 と同じ意味の字で  
草が生えることを表しているの  
下は 井 が変わった字で、澄んだ水を  
表しているんだって  
意味を合わせた字だから会意文字よ



志

漢点字は  
色を表す

⋮⋮⋮ [シ]と

生の ⋮⋮⋮ [セ]で

⋮⋮⋮ [シセ]となったんだ



生

⋮⋮⋮  
⋮⋮⋮  
シイ

色

⋮⋮⋮  
⋮⋮⋮  
シア

色へんて何? 

お

漢点字では色を表す符号があるのね

志

色へんというのは、普通ないけど  
色を表す文字は、象形文字や会意  
文字が多いんだ

そこで 色 ⋮⋮⋮ の ⋮⋮⋮ [シ]を前に  
置いて、色を表すことにしたんだ

⋮⋮⋮ 赤 [シカ]

⋮⋮⋮ 青 [シセ]

⋮⋮⋮ 黄 [シコ]

⋮⋮⋮ 黒 [シク]

⋮⋮⋮ 緑 [シミ]

⋮⋮⋮ 紫 [シム]



青を含む漢字

清

[456セ]

精

[ノセ]

請

[235セ]

情

[ルセ]

靖

[マセ]

静

[セ25]

青は あおい？

お

この字、あおい色だけど、この句のように、緑色も含んで

広く使われるのね

あおくない青、何か他にあった？

馬の毛色の「青」 これは黒いよ

青春の「青」

未

これは季節を色分けしたの

「青春・朱夏・白秋・玄冬」

これを人生に

あてて

若い年代を

言うだって



青  
春



Go!

セ

田

田畑を表す象形文字  
音は「デン」 訓は「た」

縦線、上角かぎ  
中に縦線、横線 下に横線

漢点字

...

[タ]

お

この字はこれまでもよく出て来たわね  
耕作された田畑を象る象形文字ね

\* \* \* \*

志

この句、どう思う？  
同じ蕪村の

鮎落ちていよいよ高き尾上かな

という句に似ているね

夏は緑に覆われて、山が低く見える

秋になると田圃が刈られて

周りの緑も枯れて

山が裸になる

絵になるね！



代表 岡田 健嗣

### 三 点字の触読について

前回では不十分ながら「点字離れ」について考えてみました。「点字離れ」というのは、いわゆる「活字離れ」とは違います。点字というメディアそのものから遠ざかっていることを言います。

この四〇年の間に、視覚障害者の読書をめぐる環境が一変しました。それは、経済の拡大に伴う社会の変動が、ボランティア活動の盛況と、かかるコストの低減を実現して、あたかも視覚障害者に「自由な読書」を約束しているかと思わせるほどになったのです。

しかしそれは大いなる錯覚で、視覚障害者の読書は一般とは違って、市場をとおして供給されるものではありません。また社会保障の対象でもありません。私たちが生活しているこの社会は、その経済基盤を市場経済に置いていますし、市場から供給されないもので、しかも万人に必要とされるサービスや財は、社会保障として税や社会保険の支出によって提供されています。しかし残念ながら視覚障害者の読書は、その中には含

まれておりません。書店で購うこともできませんし、行政機関から提供されもしません。現在の視覚障害者の読書は、そのほとんどをボランティア活動に負っています。またその活動は、私たちが生活しているこの社会が支えることで成り立っているのです。この任意の活動が、唯一読書の頼りと言っても過言ではありません。

このように考えて参りますと、「点字離れ」の本質に迫って、視覚障害者にとっての文字である『点字』をもっと大事にして、私たち自身のものに育てて行かなければならないと思わないわけには参りません。

\* \* \* \* \*

#### 点字符号の出現

ここで、点字を「読む」という行為について考えてみたいと思います。点字は指に触れて読みます。本来文字は視覚に訴えるものですが、そのままの形で指に触れて読みたいという視覚障害者の願いが、この点字の底に流れています。

一八二九年フランスのルイ・ブライユが、現在各国で使用されている点字の元であるフランス語の点字を



【第一図】

ルイ・ブライユの点字符号表

1. ⠠⠁ ⠠⠃ ⠠⠉ ⠠⠊ ⠠⠋ ⠠⠍ ⠠⠎ ⠠⠏ ⠠⠑ ⠠⠒  
1a 2b 3c 4d 5e 6f 7g 8h 9i 10j

2. ⠠⠓ ⠠⠔ ⠠⠕ ⠠⠖ ⠠⠗ ⠠⠘ ⠠⠙ ⠠⠚ ⠠⠛ ⠠⠜  
11k 12l 13m 14n 15o 16p 17q 18r 19s 20t

3. ⠠⠝ ⠠⠞ ⠠⠟ ⠠⠠ ⠠⠡ ⠠⠢ ⠠⠣ ⠠⠤ ⠠⠥  
21u 22v 23x 24y 25z 26 27 28 29 30

4. ⠠⠦ ⠠⠧ ⠠⠨ ⠠⠩ ⠠⠪ ⠠⠫ ⠠⠬ ⠠⠭ ⠠⠮  
31 32 33 34 35 36 37 38 39 40w

5. ⠠⠯ ⠠⠰ ⠠⠱ ⠠⠲ ⠠⠳ ⠠⠴ ⠠⠵ ⠠⠶ ⠠⠷  
41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

6. ⠠⠸ ⠠⠹ ⠠⠺ ⠠⠻ ⠠⠼ ⠠⠽  
51 52 53 54 55 56

7. ⠠⠾ ⠠⠿ ⠠⠰ ⠠⠱ ⠠⠲ ⠠⠳  
57 58 59 60 61 62 63

ENGLISH BRAILLE, AMERICAN EDITION 1977:  
American Printing House for the Blind

るためこのようになったものと思われず。

ご覧のように、最初の「一〇個の符号に a から j が当てられています。この符号は、上の四つの点だけが使われていて、下の二つの点はフリーです。

一 一番から二〇番までに k から t が当てられています。点字符号は、一番から一〇番の符号に三の点を付け加えたものになっています。二 一番から三〇番、三 一番から四〇番もそれぞれ三・六の点、六の点が付け加えています。四 一番から五〇番は最初の「一〇個の符号（四つの点の組み合わせ）」を一系列下げて、上の二つの点がフリーになっています。

五 一番から六三番までは、残りの符号です。

欧米の文字の基本であるアルファベットは二六個です。それ以外の点字の符号はパンクチュエーションに使用されますし、それ以外は、読みを容易にする略字の構成に広範囲に使用されています。

\* \* \* \* \*

## 難しい触読

従来点字は「六つの点の組み合わせ」と説明されて参りましたし、ここでもそのように書いて来ました。しかし点字を読む者として、私にはこの説明が何かもを逸れているように感じられてなりません。何故かと言えば、点字を読もうとする時、指先に「マスあるいは二マスを触れると同時に、その点の符号が何の文字か判読できると感じる」ので、六つの点を、一つ一つ数えながら読み取っているわけではないからです。また反対に、指先に触れた途端に読み取れない時は、その内容がいかにか些末なものであっても、判読するのに多くの時間と労力を費やしてしまいます。それは案外しばしば起こることで、読み取りに失敗した者は、大きな失望感と徒労感にうたれます。努力の甲斐もなく、疲労ばかりがいや増して行く。

このように触読は、読み手の健康状態や周囲の環境に大きく左右されます。大変気持ちよく読める時とそうでない時があります。うまく読み取れない時は、指からの情報が乏しく感じられて、指先に気持ちが集中できません。触れている点字をそれが何であるか懸命に読み取ろうとしますが、空しく果たせません。その

ような時は、指に触れている点字の符号が、単に点の集合と感じられるだけで、読みにも意味にも結び付きません。その時読み手は、点字を構成する点の数やその位置を定めようと努力して、その符号が何の字であるか見極めようと苦心しているのです。しかし反対に気持ちよく読める時は、指先に触れた途端にその点字の符号が何を表しているか分かるのです。

「読む」という行為は、晴眼者にとつても生理的なキヤパシティーを一杯に使つて行うものです。視覚の能力を投じて行われる読書を触覚で行おうというのですから、かなりの困難は覚悟しなければなりません。恐らく上記のブライユの点字は、当時の他の触読文字の体系と比べて、読み取りの確率を大幅に向上させることに成功したのでしょう。しかしなお、点字を触読するのは難しいことで、それが点字離れの大きな要因であるに違いありません。

\* \* \* \* \*

### 六つの点のポジとネガ

点字は六つの点で構成されています。その組み合わせの数は、フリーを含めて六四通りです。この六四個

の組み合わせを即座に区別して判読できれば、点字は読めるといふことになります。

しかし先にも述べたように、私たちが点字を触読する時、六つの点を、その数や位置から判断して読み取っているのではないように思われます。すなわち、指に触れると同時に「分かる」ので、それが何なのか、考えてみたいと思います。

表二は、点字の六つの点の六四通りの組み合わせを試みに並べてみたものです。ご覧の通り、足して六になる組み合わせを上下に並べてみました。〇と六、

【表二】  
点字符号のポジとネガ

1.	フリー 6個	
2.	1個 5個	
3.	2個 4個	
4.	3個	

一と五、二と四、三と三です。この表は、上下を合わせる、ちよほどポジとネガの関係になります。互いに点の打たれている所と、打たれていない所が相合った関係になっています。

この表で分かることは、点字は、点の数やその位置を触知して読まれているのではないとすると、点をそれぞれ相互に関係付けて、より少数のグループにまとめることで読み取っているのではないかということです。一つの点の符号があるとすれば、その符号には反対の五つの点の符号が裏に在り、二つの点には四つの点、三つの点には逆の三つの点というように、ちよどごとに図と地の関係を成り立たせ触知しているのではないかということです。

言い換えれば、五つの点の符号は、一つの点を欠いた符号であつて、五つの点を読み取るのではなく、欠けている一つの点を読み取つて、結果的に五つの点の符号と読んでいるのではなからうか、同様に、四つの点の符号は、二つの点を欠いた符号として、また三つの点の符号は、反対の三つの符号と相対した符号として読み取られているのではなからうかというのです。

以上のようなポジとネガの関係が想定できるとすれば、点字の符号の六四通りの組み合わせも、一挙に三二通りと半分になるのです。

教室から

子どもから 白川文字学へ

小学校教師

伊藤 邦博

★ 1学期も終わりました。私のクラスの子どもたち三十四人は元気に1学期を終えることができました。体も丈夫になりました。1年生のころは学級全体で欠席が多かったのですが、2年生になって激減しました。1年前入学直後から不登校傾向だった子も2年生になってからは夏風邪で体調を崩した以外はお休みなしで学校にきました。集団生活上のルールやマナーを学習することなく学校に入り、多くのトラブルを起こした子達もほとんどが皆と仲良く生活し始め、学習にも集中して取り組むようになってきました。

2年生に進級しても相変わらず楽しくすてきな詩をたくさん綴ってくれ、担任を悦ばせてくれます。最近生まれた傑作を二つ紹介します。これは言葉遊びの作品です。

自分の苗字か名前の一字を決め、ずっと各行の最初の言葉はその音で始まる言葉で書き始めるといふ条件をつけました。そして自分の生活や事実や思いや発見を書くことを二つ目の条件としました。

次の作品、2年生の少女の素直な息吹が聞こえてき

ませんか。詩に不可欠のリズム感も出てきました。子どもっていいなあとつくづく思います。

パパはなまけもの／ながしま なるみ

ながしまゆきてる（成美さんの父上の名前です）

なまけてばかり

ながいじかんテレビを見てる

ながいやすみでもどこにもいけない

ながくゆつてもテレビを見てる

なかなかなかなかおわらない

なるみがないてもまだ見てる

ながいゴルフをまだ見てる

ちいちゃんてよんで／やまだ ちひろ

ちひろはよばれていかないとき

ちいたろうとよばれる

ちびとお兄ちゃんによばれると

ちよつとむかつく

ちいさいおとうともまねしてよぶ

ちがうよびかたしてほしいのに

ちっともわかつてくれない

ちいちゃんてよんでほしい

★ この作品を別の観点から眺めると漢字をほとんど使っていません。意識して漢字を綴り方に使用する子はわずかです。低学年で綴り方に漢字を使う子はいままでの経験でもほとんどいません。驚くことではありません。子どもたちは普通に成長しているのです。

私は漢字の指導では、漢字のもつおもしろさと造字の巧みさを子どもたちに伝えるように授業を進めてきました。書くことよりも読むことを中心に指導を進めてきました。私のクラスの平均的な子どもでも漢字は読むだけですと、2年生の一学期終了時でおそらく二〇〇字以上読みます。1年生の新出漢字が八〇字、2年生のそれが二〇〇字。2年生の終わりまでに二八〇字の指導をすることになっています。もちろん書くことも含めてですが、今の時期を考えればまあまああの進捗状況です。

保護者会で「先生は漢字のテストをしないんですか、うちの子は漢字をほとんど勉強していないんですが。」私は上のような内容のことを率直に話し、理解を求めました。親は、漢字はドリルを使って書き取りの繰り返し、練習と漢字のテストで覚えていくというのが普通という認識です。親は漢字のもつさまざまな知恵、法則性、漢字の後ろにある古代中国の文化、それが現



代の日本に生きる私たちの感性や意識にまでも大きな影響を与えていることなど知る由もありません。親たちもこうした漢字指導（こうした漢字指導は教育といえるかといわれれば、ノーと答えるしかありません）しか受けてきていないのですから。教師だってほとんどそうです。私がいくら新しい漢字教育を実践的に伝えても、ほとんどの教師は興味を示しません。

私も一瞬弱気の虫が走り、漢字のテストでもやるかと頭をよぎりましたが、考え直しました。一昨年1年から6年まで受け持った子どもたちも今は中学2年、この子達には一度も漢字のテストをしなかったのに、特に中学に進学して困ったという話は聞いていません。むしろ漢字だけでなく全体的に平均よりがんばっている様子ですから。いままでの私の指導方針を変えたらこの連中にどう批判されるか分かりませんもの。

漢字のもつおもしろさ、巧みさ、法則性、その背景にある文化を伝えながら、ゲーム化しながら漢字を学習していつてもらう方針を守りながら、これからも漢字の指導を続けていく決意を新たにしました。

★NHK教育テレビETV特集「21世紀の日本人へ」で白川静「漢字の宇宙」を放映しました。

白川静氏は七〇年間一人で独自の方法で古代文字の

研究を重ね、七三歳で字書3部作『字統』『字通』『字訓』を完成させました。これらは私が漢字の指導をする際のよりどころです。この3冊を手にとつてみるだけで白川さんの仕事が想像を絶する大変なものであることがわかります。

白川さんは二千年間続いてきた漢字の字源の体系を覆しました。今までの漢字の字源は後漢の許慎の「説文解字」を拠り所にしていました。「説文解字」の完成は紀元百年で、文字が成立してから約千五百経ており、許慎が用いることができた資料は、その最後の五百年のものに過ぎないと断じます。

文字の最も古い資料である甲骨文が紹介されたのは二〇世紀に入ってからのことです。甲骨文字の次に登場した金石文字は周代の儀式用の青銅器にいこんであった文字です。金文は宋代に各地の開発が行われて、出土したといえます。


つまり字源のバイブルであると言われた許慎の「説文解字」が書かれたとき、許慎は古代文字の甲骨文字も金石文字も知らなかったのです。

白川さんは甲骨文字や金石文字の研究を進め、「説文解字」には誤りが多いことに気付きました。あわせて日本の古代文字学には字形学的には得るものが全くないと断じ、何十年も古代文字を書いたりトレースし

たりしながらして、独自の方法で独学で研究を進め白川文字学を完成させました。それが最初に紹介した白川さんの書いた字書3部作『字統』『字通』『字訓』に結実したのです。

そんなことを紹介した番組でした。深い感動と快い興奮を与えられました。私は白川さんの「字統」をもとにして漢字の字源を調べ漢字の授業をつくっているのですが、この番組を見て初めて白川文字学がはつきりとわかったと思うと同時に、白川さんの仕事とその功績に感激し、頭が下がりました。

テレビでも説明していましたが、白川文字学の大きな特徴の一つは「㇇」(サイの音で読む)の概念です。白川文字学の「㇇」の系列を説明します。


**言** 古代文字は  この字は辛と口(㇇)とに

従う会意文字ととらえます。辛は刺青で用いる針の形で誓いを立てたときそれを破ったときは刺青の罰を受けることを示す。口は㇇でその盟誓の書を入れる器の形。言はその器の前に辛(刺青に用いる針)を置き、神に盟誓する言葉をいう。

**音** 古代文字は  言の下部に祝祷の器である

㇇であるが、そこに一を加えて、器中に自鳴の音を

発することを示す。言は辛と祝祷の器である㇇とに従う。神に告げ祈り、また誓約するする時に、もし偽りがあれば神罰を受けるということを文字化したものである。このように祈り、神の反応があるときには「音づれ」としての暗示があるとされ「音づれ」を音という。

**可** 古代文字は  ㇇ 祝祷の器の形で、祝詞を言う。神に祝詞を捧げて祈り、㇇を木の枝で打ち、祈願の成就することを迫る意。

**歌** 可を二つ重ね欠(口気を吹き、言葉を発し、歌い、叫ぶ。)もう必死になって神に祈るのが歌だったのである。悲愴ですらありますよね。

見事につながっていると思いませんか。告、史、各、客、使、これらも㇇の系列の文字です。字形も文字に含まれている意味も㇇の意味に関係しています。次回にもう少し白川文字学について述べてみようと思っています。

白川文字学から古代人の生活や文化が見えてきます。

## ボランティア活動について(再考)

会員 宗助 悦子

以前本誌でボランティア活動について考えた際に、日本での一般的なボランティア活動の定義は、「自分の余暇に出来る範囲で、誰かの役に立つような活動をする、ともすれば自己満足になってしまふ活動」であるというような事を書いた。

本会の活動は、漢点字の普及及び漢点字訳書の作成を起点としているが、未だ試行錯誤の状態である。

一つには、任意の団体であるため、思った方向へなかなか前進出来ないこと、もう一つは、本誌で紹介している様に、漢点字の普及を切望しておられる方々がいるにも拘わらず、視覚障害者の声を本誌に掲載した皆様以外になかなか聞かせていただけないことである。

ボランティア活動というのは、ボランティアを受け側の意見が反映されなければ、誤った方向へ行ってしまう可能性が常にある。よかれと思つてしたことが、迷惑になってしまう事もある。

本会のような普及活動を伴つた活動の場合は、二一  
ズに基づいて漢点字訳を行うよりも活動が難しくなる。  
本号でも再び取り上げているが、点字毎日の誌上で

は、6点漢字と漢点字の論争が続いている。

漢点字の方が読み書き共に利便性があるという、視覚障害者の人々の言を信じて活動しているが、実際に日常的に使用してみた者にしか本当の所はわからないことである。つまりは、ボランティアは口出しの出来ないことなのである。

利用者の意見あつてこそそのボランティア活動なのだと思う。他の障害をもつた人々も含め、なかなか率直に言いたいこと、ボランティアに希望することを言えないということを書く。しかし、それらの声なくしては、ボランティア活動は成り立たないのではないだろうか。もつと多くの声を望みたいと思う。

さて、前号に野島静先生が「漢点字の公認運動」についての原稿をご寄稿いただき、今月より全国でそのための署名活動が始まった。

我々、横浜漢点字羽化の会も野島先生にご協力させていただきます。これこそ、はつきりした形。これも大きなボランティア。多くの方々のご協力をお願いします。

万緑（ばんりょく）の中や吾子（わこ）の齒生え初（そ）むる

中村 草田 男

万緑と言えば草田男、草田男と言えば万緑といった具合に両者は切り離せないものと言ってよからう。この句によって「万緑」という季語が初めて使われ出した。単なる新緑とか緑といった言葉にあきたらなかつた草田男が旺盛な生命への讃歌のもたらしたものだ。大いなる天地万象の緑、その滴（た）るようなみどりとポッチリと白い歯が生え始めた吾が子のとりあわせのなんとも言えぬ素晴らしさ、みごとさにはこれこそ名句だと感嘆せざるを得ない。

草田男、昭和十五年の作（朔）

螢火（ほたるび）や生涯温泉（いでゆ）の下足番

井元 きよ

作者は無名の年輩の主婦。「螢火」というと心に浮かぶのは、人恋いの、或いはものさびしげな恋情でありましょう。しかしこの句は恋愛とは関係ありません。季節は水辺に螢が飛び交う夏の盛り、ところは人里離れた山深い温泉宿とでもしておきましょう。そこに、もう何十年もの長い年月を一途に下足番として勤め、いまはもうすっかり齢をとってしまった老人がいます。

誠実にそして無口に生きてきた彼は、生涯下足番で終わるのであろうことになんの不平も不満もないのです。お客様の履き物を整理している彼の前を青黄色の螢火が揺れています。心にしみる一句です。（朔）

### 編集後記

本号も多くのの方々よりご寄稿頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

前号で掲載いたしました、漢点字を盲教育に導入するための署名活動が、鳥取県の野島静先生を中心に「盲教育に漢点字の導入をするため全国協議会」として、動き始めました。本会も東京・神奈川を中心に参加することになりました。

ご賛同頂けます方は、署名用紙をお送りいたしますので、電話または、FAXにてご連絡下さい。

多くの署名を集めたいと思っておりますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

### 【署名に関する問合せ先】

電話 03・3613・3160（岡田）  
FAX 045・821・4678（雨宮）

次回の発行は十月十五日です。

宗助 悦子

\*本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載はかたくお断り致します。